あとがき

昭和 48 年に貝類標本目録が岩下典弘先生の手で完成されたが、化石標本については本校南校舎の生物室の片隅にほこりをかぶったまま手がつけられていなかった。前任の和気潔先生の突然の転任があって、専門外の私にその整理の責任が回ってきたのは、昭和 50 年 4 月のことである。

この貴重な遺産に対する興味と古生物への強い関心に支えられ整理を進めて 6 年の歳月が流れてしまった。当初何から手をつけたらよいか本当に戸惑った。その頃奈良大学教授であった松下進先生をお訪ねし、いろいろご指導を仰ぎ、また、大阪自然史博物館で整理の仕方など懇切な指導をいただいた。

やはり、各生物門毎に専門の先生に正しく鑑定していただくのがよいとのことで、松下先生の紹介で九州大学をはじめとして、各大学へ標本の搬出が始まったわけである。京都大学から運び込まれた際に、大学ノート五冊に走り書きされた分類名、産地を頼りにより分け、荷造りするのだが数量も多く、標本が痛まぬよう包装するのに相当な労力を要した。輸送は、当時の山中忠昭校長のご配慮で本部月次祭に帰参する教会の車に便乗させていただいた。福岡は鎮西大教会、熊本は東肥大教会、また東京は東本の部内教会にお世話いただいたことをここに改めて御礼申し上げる次第です。

化石の整理を進めるに当たり、先ず江原真伍先生の業績なり、人となりをよく理解させていただかねばと思い、天理図書館へ通い化石標本と共に寄贈された蔵書の中から江原先生のトリゴニアをはじめとする多くの研究論文を一通り目を通させていただいた。ライフワークである太平洋運動論の雄大な構想に心を打たれ、むし暑い書架の陰で時の過ぎるのを忘れた。京都の日本地学研究会館の益富寿之助先生のご親切な計らいで「江原真伍小伝」（別所文吉）や、お弟子の沢田俊治先生の論文などをコピーしてお送りいただき、大いに参考になり感謝している。

校舎は南から西へ移り、鑑定済みの標本を正面玄関二階の標本室で整理を続けてきた。標本と共に各大学から貴重な研究論文などをお贈りいただいている。東京大学の速水格先生からは“a systematic survey”を送られ励ましていただいた。アンモナイトやイノセラムス化石について既に九州大学松本達郎先生が、サンゴの化石について大阪教育大学山際延夫先生が鑑定した標本をまとめて地学雑誌に発表されており、私共整理を進める上で指針を示された。このようにそれぞれの専門分野毎に多くの先生方から懇切なご指導をいただき、深い識見と学問に対する限りない情熱に心を打たれた次第である。私達は、こうした機会に学んだ多くの事柄を明日の授業に生かそうと心がけている。産地は北はサハリンから南は九州、さらに中国大陸へと広がっている。ことに四国は高知、九州は天草産が多く、心はいつも大正 10 年前後の彼地へとんでいる。折をみて是非、江原先生の後を辿って、地質巡検をしたいと夢見ている。

校務多忙にかこつけて不勉強のそしりを逃れ、多くの方々のお力添えにすがってここに不完全ながら目録として世に公表する運びになり、二代真柱様の深い親心に少しでもお応えできることをこの上ない喜びとしている。これらの貴重な標本が今後教育や研究の上に生かされんことを心から願っている。

終わりに本目録の印刷にご協力いただいた天理時報社の方々に厚く御礼申し上げます。

（小杉　記）

＜研究グループメンバー＞

大柳義徳、小杉武文、谷口陽二、野口典男、松村哲雄